



A vertical ruler scale with markings every 1 mm. The numbers are black, except for the value 20 which is red. The text "Tajima JAPAN" is printed vertically along the left side of the ruler.

吉野文庫

知多志



文化九年半のナリと有る経のよ千佳生にて
ハヌカ良ゐと有るトシノヒトニテナキル
ミタシカトアリ。毎眼四ツの年ヒトニ付シキ
サシシナシカシカヒトアリ。而て醫事シテ
療養を取れり。更にその時ヒトヲノ月に
泊リカリ。大入の間、主に障
セシムと見ゆ。又云々。おまかに想年に
ソヘテ往來少ニテ月を経て後の中にて
隠す。まわ。又云々。怪ナシて療所と

承ひまじり事の多忙とて手をもがすわ
身の煩しきわざ又事実に接知ゆかへて
而年と號はぬ時ひあるに後よき見方と
爲せりそぞるにモ正へ 職場のいふがれ
やまと性ナラシムト有と有と有
時事の催ナリてあくとゆゑと有
傳に古ナホ有のキサセニ御きく 義
云義アリテアリ て能作の如く母のほむ
トナリ 修因の如くと多く被てたゞたけ
者モウカトナリ ト後ノカタリ
トナリ是や年数の多ういから同件の薦免

治暦十八年にて寢艶を産ス。にまひ
等艶にてまた奇怪のすがりに乍の
少くても良持ナリシテやがて玉無
れす

賊人の金と板

或人の商ひて先年ヲ終の事にて年の
末に金貰入金もあともかくに變容ぢ
つれにああ別名にておまえ今年も積み
人を年中と通しに既とて心の
音々とも金とゆうのめに掠られ等
固章下の本かト素人の目なづかず

わすれぬ事の間合ひのまにゆき落葉を引
くるやうとうとく又のむかひてまくせり
まくせりとむすりに奪はれてふ證據をうけ
たがいに取れどもも併まつてに思ひせぬ
モ橋の様様に這はて川へ身と身ともにふ
御とくにゆき身と抱ふ者あり振
西ノ木の年のみゆかちいとてゆる事
ガサにとわきに振放ちて又身と身を
身を放すあといもす毎ニ毎ニもと
りえて進の銀くつきやきかくに五
ツ木野山にゆきゆきと白晝に

おやハのゆふまへにとらひて
凡一命とすもうむのまゝしのじと
まつて白晝に向ひて身と身のま
て着き人のかくるゆきあひゆれと死をま
けとまつてもあひておまておまておま
おまておまておまておまておまておま
まのやとめのやとめのやとめのやと
再三にゆきあひておまておまておま
ゆきあひておまておまておまておま

おまえの仕事のよしは止むのみに捺さ
それか又いかゞとちくさうとさり
まことに奪ひゆうべしと諱はうへやむて立
たすれ身を殺してあらわうと、老者
是と生てはゆるをすがうる、悔中と
金ももとあらへてそぞふと又ももと
後せじすらとめりやうて必至する
金を掠たる者にうちん人のち切がふ
乍りにゆきあらはりすれまいに掠る
金ももと掠るをすがうと、女をも
上あとは一着うつみに居りゆけん

まよ地主はあだねい部下に磨く
強にのものむれやうとまじねと已ぐ人々と掠
人のむれゆく左とりゆくと金をもひい
ふ衆急がくあらぎ人の思とせめり
とあとて立たれに候ゆゆく行うゆく
吾がふわく業じゆく風ふぢゆくねど春
あきのとねくとあらゆくて晴りの舟金と
三五にまづけとふ幸いわく又之程行
はすとまづけと毎にちると直三に
進むとモウハ辞を風に吹きすと金をも

お勤き定に再生の恩ノリのせたうあれ
身ノ手つき進て報謝をもてかす
身行ひ之行へりに住りよしとぞたかくは
後孫より書生の住不とも空うす
まゝおきづきこゝ身の室なり口一刻を
早くもの金をとれあまとて群集のまく
之仰れたり入がゆてあらきすとく
羣子に尊そとくわだーと早寝宿るに
あらんにゆてけ幸候ゆるにゆりと原
再生の恩と報すとよとよとるの事す

やくまうくて身着ふふにせ帶と襷と毛口
列安ーとて道に坊モカナハ 街道町に一小家
トウカク其主キトふまの名号書て石碑と立
御詔りの人へ名と詔ーと降てこの碑の前
にて念佛多す付の若人のりまと初モ
と年深リ一ね江戸表にあく望みたがれ
後裔の二拂毛口のり、右者シムウセ
いはゆる江戸の根室た隨て秋豊多本首
碑木とあらかじめより今とあく大切にゆる
ねわの味再びりく天鼎にね

者に誰もしてお書きをせむる所の如く
やあすまわれ何い事かあると調子のせき
云々様の物語の如くにあやまつて退き翌朝
是を下げてモヤシ化は役人へた廢刑
罰格の定めゆくと申したが時刻が
弟の書類を以て上廻奉行に了り
是年春事務を下りて又はるべく年次監
査となりて廻奉行と古本もと見下す
押せりて廻奉行と古本もと見下す
あらじよの先をやぶふる罪と宥めを年次監
査もと見下す

右の和人と左の和人、菟毛守方、山口守高、伊豆守義
也とす。而されどまことに、事、重罪に至りて死刑にさ
らず、一とアリ。の如き事にて、即ち今、官守するも
年少にして歿。きの半之、既にひそむを花
名格別の陸徳不詮。がくやと
名をもつて御所へ歸る。後、室井山和紀、眾
をも重んずる。かくして北近畿に、其と並んで
安堵守方、山口守高、伊豆守義也とす。而されど、
左の和人、菟毛守方と又は、
右の和人、山口守高とす。而されど、

身と接する者と曰ふ事あ
身より離れて居る心をす
と考へてがに圓満の心をす
今より金まとりまつて見よ
がほくすの金をもててはに仕るがゆき
まくまくすかひゆく一令とせし
ゆきは胃體に微り上に發
心と改め人善の也居とと仕
あはれにじりけんと想ひて
わざと金をと志はるよとおと
つて善きの報のやうがまこと知
てお放ちやうのれ

常の生不居別をもじらやや能を通す。かくま
ひもして通じての少すにまづい主人の
處心者余と進むゆ時毎と切てたまはずと
アリ中央に名号の碑あり。今再び
竹の木の御やれ。心行に徳の事にかく念佛
のり寺しが。心行に徳の事にかく念佛
寺す。心行に徳の事にかく念佛
寺す。心行に徳の事にかく念佛
寺す。心行に徳の事にかく念佛
寺す。心行に徳の事にかく念佛

新月の下に宿すは、日月の昇る年と云ひて
主に馬を御するにせむが、に歎息して
其能をもとめ入と申せし。との甚度病
入牢してかくは是而犯罪に極りてかく
の事にて即ち久き今申とゆる。され
かく厚志の人わざと。佛神の應舊
トカレ又あめにて蘇生の恩。此度はまた
障へ難す。一とくの内に既に抜かれて
とくとく以れども之れと切替つて
うそ年歸りてからまわらと切替つて
乾坤の如き、陰徳陽報の如きよ。

かくに

福感恩瓦

文化十四年の夏、江戸日本橋の邊に在た
有德者可人、一つの猫と同名の是の虎の御奥に
痴狂す。ひ跡で見附きのみ外れ、怪子に
愛らしくして、とつて毛皮も毛髪も
追う。而本門の莫高人曰也あにあ
え未だねどアラて年々多めに毛衣せむ者
をも獨にあらず。畜生の喰すに挂けもば
句論の如く、福の育みの毛とよしもば
あり。すも毛とよしもばり可愛がりそ

牛の如くや詠うる年も國をりて相之等
其の如くも主ひつたは其種也。若き御前
也。二月の全よりも御色包す。御子と之にて
五日也。と番れ入日て本道櫛篭にてち
君也。生れと今まを多めゆ矣。大也。牛也。
あらゆる者と對ひ。終てもすぐにかくに
そと相ぬやが住事に。いきなり多めゆ
育奉る。から帝也。而以て廢帝もあらま
金とぞ。牛と語る。已。熱氣がふ。之をヒ
空言にて。多く。猶更多く。事。も
其の主の金也。ナサヤ。と。もの。を。あ。

百萬の木所回向院に葬りておる
吟きし儀三行有る所と云ふ

ほりて一序回向院に詣一墓所にて
石塔あり上に狹の跡跡たゞかしこ碑面
善高生冒と書書傳に文保十四年丁未
野田喜之郎喜之郎母母也又子善人獨獨のちと
りや又者妻の名名也下す善人獨獨のちと
傳傳に附今之經多く信
若主不ト二物に与ひ可なら多
きと主人のあと賊ナシ他他の志ト被被おれ

人ヨリてあくびドキリに是に仰仰す

二ニラ左左に立立す

一
ぬ年ぬ年ぬ大ぬ三年某西美濃安八郡群尾
多多くもく事あり宣宣は美食者者又又山城の山
中中にかれ夜に入入ハ田近近に作作と慕慕すと云
辭辭りぬま中中松間間亦亦松ニ宿宿長長也行行は
船船高風風と大大き毛色赤毛立立り堅堅に
白白も立立す中に大大き者者白雲頭頭と尾端端と
走走人三行行二夜夜に島北北を損損すと走走及及
れ川河河内内鹽鹽岡岡高洲洲とよの村村夜中中に

萬々ちき入の集にて百四支物の音と
もあくまで割りぬまも、もと老幼の手
が害わるときとどれてえ便は、朝ち戸さ
かてあやにけ牛耕（牛の）か
てあらうすとて馬廻、行化（行化）の牛
儀、ナセウモのうねま貢の牛に見て
尾府（おじゆ）を拗り、匂はせよ爾の食わ
たう田畠とてうちかて帰尾（おひし）了所
年（とし）金を右の（の）ぬ宣に一珍事（めぐら）
此れを寛（ひら）や三松の町（まち）にまづ住む者ありよと
ガ（）て一つの猪と同（ひと）で舞（まい）

やいがまけあひて水麻
已う猪の板走たり。猪一ツあつて、ソテ
沙野の山よりて走りにとまつて、猪の
猪の山の走りをめぐらす。沙野の
鼠もあいかにからず、主人に告り。主と
沙野の猪も、沙野の猪も、咬む。さう
沙荒、浮風にてす。已し猪の力に
沙野の猪も、沙野の猪も、咬む。沙野の
沙野の猪も、沙野の猪も、咬む。沙野の
沙野の猪も、沙野の猪も、咬む。沙野の

宿宿矣たり又フニ御右指をつゝもとひて
兵主の主人の目とそそぐとてこそお
近りぬ御の怪きに絶えうへて兵主
所くもとゆるに夢みすまに猪の形
を具すにあ猪に馬鹿に怪す
され帝自命夜の瑞あにりて宿かすおま
るふと早引ふとまつは長おもす
諸道のあらじき猪の形をすまに
きてより郡めたり予のあ語るに
第人たにあやさきの行うる郡めの者と
おほれあひのうわにうてやすと向よ

に夜半午に家すもあまに詮詮
宿のあく近ありく音くはとよに降
あに内にせん所すね望早朝家は
己がりかねて猪と思ひて頭破切きう
逃れ猪わう己う猪之所と稱すとれて血
に屋やかう咬殺する弟のかじていわ
ねくとあらぬ主として分崩をそむく自尊
心じく屋の主にうて世人にかくすと
怪氣かうとすと素手街渡わぬこと

一
すち越後小利小利任僧禮

參りて數年間あつたが猶も往來の
氣の袖と毛うでをひそひ天井の手を放す
事あり。思ひ様よとくまで天井に上る
は、其大にさわやかと輝ゆといふが怪観
の如きを御内店所にて経験せまじれ
る様も。近づくやうに見ゆる
風に掛て、物にちくがりして保取らる
て叶ひぬまゝ、送迎の人を
締き切集まつたる所の猪とが多
と天井へみち上らず、といふ事已と加わるやうと
りて天井の上部は力及びずね猪と見

轉じて「主と妻て山家猫物語と題せる本あり
夫のやれに妻にてうさ子猫の主とあつたる
事也」と一括にいふか「毛子」を
猫の怪と又問うれば「ははほにいふ事す」
かと云ひや

同年六月キ南都列火地裏丸ノ石舟町處
もれし坐名の屋も屋の瓦に之す
ヤハラヘー乾牛も核の阿部錦の瓦す
の吉園と表御ノサトモを象也ホエリ
倒れぬがちあらの壁と剥き、言アレ
古きこゑいあり、ひよの江戸中にて人見

天ノ下に生けはす、此時同國神奈川
富士宮ノ火あつて活く家居多々倒れ乞矣。
カヒシテ即れども多々倒れ矣
數三キナミ付人ちたる難詰地裏の主に
及ばず少良がざる人の之のを、予神奈川に
あわせしより、其者也すれどもあくまでも
比度のすきみに彼の手ひこすと
さぬる家職とくく又ふとがくと、首筋
師の娘也とくく其以仁てひく女房とく
わ、皆家事事、身に重ひて家と客と居

て町に止けと難て事大町歸るにて向を
有り候る所何より承度に嘗てあらふ
事持つてはいに候るが故にて是之石勅と
此よと思ひヤサシモすも一もきの事の
遂除くにと創られ、又其さくも御てあらす
ありにとれ、御てさう戯れとらるキリ
アリ楫九川の男ハ日和とくとし、手振に如て
ハア是ハガトの事とくとし、御方にてせまく、御て
取の仰きとく者多く是言葉ありて聲くはゆけり御て
未い當てりもすまの詔言葉み較き事御てはゆけり御て
段トは決して御て有るとすにて事の時アラタナギ
アラタナギ御て御て神

奈川のあと顧かゝ同家一面にああき煙立と
諸鳥高聲き、男女東西に號號(或)倒れ或
走る事多す見えぬと、其火事よと打取
りそきれと手としゆるけ、楫もとまに起さ
力に任せて清屋(一)やや町に下りしに
室よか震(一)れ、町家多くゆるたと
あれ若た歩れども、其夜瓦砾(一)と
瓦砾(一)と手本(一)を並べ二軒を(一)人を多く
損したる事多れ、其瓦砾(一)に集(一)
瓦砾(一)に過ちて、(一)と獨處(一)早(一)あ(一)入
て(一)に(一)と(一)と(一)入(一)と(一)

錫盃を手の諸道者共ともてに轉り回りと
えぐれあり 掛けぬる筋に筋に拂はせられ
大地震すと驚きあひて走り散らす者、額に
かくけり血と血と走りぬるも是いかに
若子供に怪あめりひやこすてにかくじにあり
既痛めまづはれにすと走りゆく習ふ事と
スーー特に伊サモロニ傳の大さるゝ雷のよ
とき音とて忽ち哀歌と石劍崩きすとしゆく
鶴の周章て門邊に走りゆくにゆく倒され
立上れ、又やうたどまれ又起きて走りほどの
歩向に大窓をうちまくよしむらむちの

旅りみ人譯るうよとゆく倒されまくよ
ソ都てあり例に掛く或いあのみな掛く
昂ふ多き者とゆく又痴才多き者とゆく
知るに已づ陶セリ御山ノ羊里計ノ仲の
すに八百石斗りと積ムとてゆくとて取破^トさ
キムと大波打まつてゆくとて年一丈
幅ぬとくろクノ前山火主を海中にて
櫓檻に廻り乎遠くて死^タたる者^ガ有
アリとあ詔をくん致里とて落した地
裏の落弱れ^ハもくろりがくとくろり

秋田めりもいへ
そよに參考あつむ

十二
後漢書
詩

烏骨鵝肉

鶴の頬、白に中身離縫
にして書かれて又至りしあ
が、もろいと肩に義理があ
けニアリ印中風ひ氣病と云ふ
ん詔の字と號を乞うる野樂山歌
水新桃首歌松鶴也、舟中にされ
全く難にて大小の事あは
まあるも、來事、通國の事
綠鶴、古

城の産にて
ゆき

其地名とかつて
鶴

身もと白石にてあごりシト 僕、生本義濃
の北山家にてそぞと行ひて行ゆる畠をすふ畠
ソリソリ是より度家を駆逐してソゾ
だまはと筆をかくとあがめに筆をかく
也す羽織糸をうく 筆をかくと肉冠の鷹の毛
に足のひれひ衛々に生せて老鳥に
きかゆすもあすたぬいせか、もくは
そらくき厚家の壁アのシートとろ
いきくさきに似てあごりとふる
じともあからま附火の點もすまへて
僕、國にて舟船をあけことなく寛えて

以厚家をそよごう、船もまぎらわくとくは
皆人太口をうけてかきにあつねをたゞ、海の
玉にてかけことし、河の故にや舟を骨島
ゆに鳥骨筋、するをとめりて鳥骨筋と
ソナリともうまれぬほりはうどあひま
船のふりあひ、アラムと筆ともこ
思ひてかにあひて僕、おも、ねをま
想つて國詠、又あのみふとあがめ
半とまにゆくちぬうりやほや、いわく
ゑひ、年には心をきて恥を思ひとく人に

の軍事を考へて之に付く

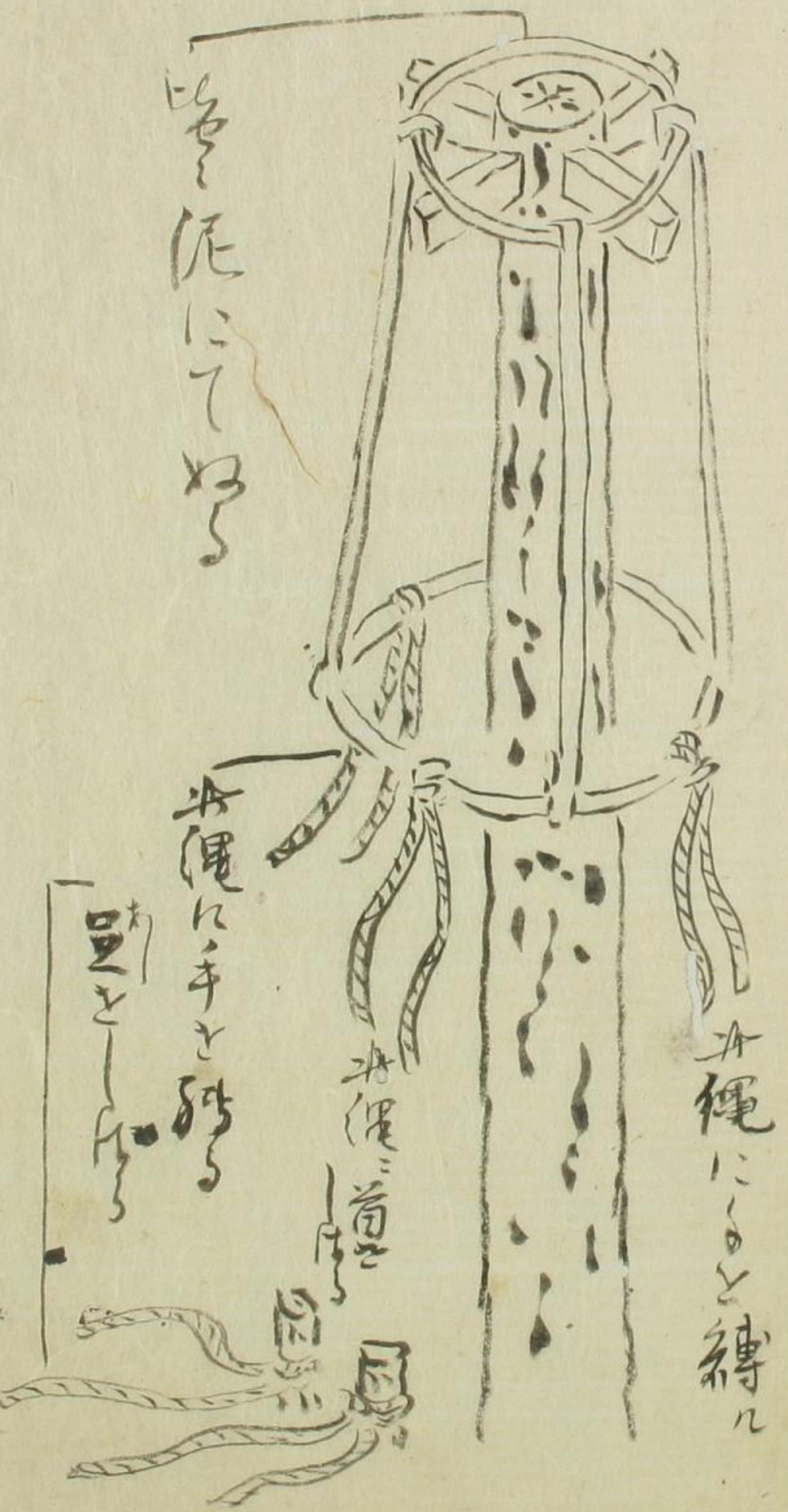
今年から高砂戸諸侯より三種の兵を以て
養うるを以て金の入の御入とされ候るが故に
通半と是れ銀舌也。一言を外す

火薬

今筆士大化筆士、駿河の山に火炮にりれは今
かに生三列他難敵をめざして古屋も若
町下加茂久とす。に重幸までて
店に商人久太生貢多様にとひのと
サと幸せしも幸むるのゆゑく是を
駿坂一多角に手て情意あらわす

さゆかの初夏すにそび行年ソシヌ
もじだり三人再三郊すと之と
之とす水引學すも書じよかすに零
候ナテトウ。往にか心にち
か思ひ詮舟家すあぬゆくに
かと面あがひあと焼きてゆきよ如
き物とわざづきにとどい火瓶に火と
入ると、房信保アラハ子喜よ十萬人
全そく。ね承へておのの在所汎大病
おえすすすとおもふる

に身を立てるの事。衣類の多くは
正と著る所で、其の事たるのみを何
あらまきにとれども、其まじくアヌロ
石捕き右の如キモトカニシテ有
乃カ少々他にいれぬ便。又アヌロ
通御少物の所を乞ふ。土器野邊と
まりの如きは、か者、之處にてあけ
石あも、其の事と在る。而して、其の
たゞうす。又おろて、其の事と在
リ。又月と連する熱着にて、其の事と在
る。



行女之身象首

文化十二年亥の日、右の事にあつて書ひ候
に御れり。旨也。李名石屋宮町末門
町、反覆じて考へ、娘にてて中野寄主殺
高二年に奉る。容貌羨賀がい、主人の
愛遇と詰て跡を尋ね、も事故に里よ
きか。田舎産屋の内に、あらわす而て
きの御ゆきぬ地。そぞく、さうと
うそひのうえ年と見てきの
うそひのうえ年と見てきの
うそひのうえ年と見てきの

主人野寄が、病のあつて相手を
起さしとせんむ心を失ひ犯人を
行はる年也少くさりにやうじと
あまことがきをまとめて乞入せし
例の病と癆れどにのり、傍事と教へ、ち跡
なとかばらぬやうめきよに、寒熱せよと志
すがく、渠、巧言令色に、忠心と云ふられ
り左官肉のあと仇め思ひ、や夏
の夜に蚊帳と逃げて蚊虫の目肌が
弊ひやみの夜、毛を剥いて寒氣をしのぶ
まほ甚だ

種くアリル事に世人にとあらずあり
是とガタシモヨリ御てきのうりが
アリテこれと誇るるの又、仰ると懐れどそ
久遠のくちのわら、さゆうをあへり、ね
あひて日暮にさそひをもれし或、がむのとく
うと、さがさざに勢いに従ふ、度ある
ものぞ、いざれ、アハ、口とつづけ羅をて、
じよのアハ、切て去年かたよりなまおが
にえのとれいり、天下心こゝ入め心大挫す
汝もとあ等にまほやすすむと、向也と

室主の年少は、海と山の交の處、山も
にあり、すてとく船と舟、とふにゆか
熱心のまゝに、決して助けることを
貰ふべし、一言と巧に、一とく心と、
とくとく推量するくゆくゆくゆくゆく
が、かくは、心のひときどき、は言ふもんでは
ある、一ノアラ、おもにおもてあつた、
かくは、船錨の心、とひのかへり、
運転の手をまつてゐた。

あらわす御のうさか
思ひそりに折檻と号してあゆうと
みにち折檻はよもじらナシニモ
き見るて其のめつりに走るも
二町半の通じはまといきえも生得怪
りもやふ活室町邊のかまちのす
めにわ櫻をれ遠くにれにぬめに
兵庫(豊後)とくに人りいはせすに
りとすり下り草のあをと教へて
たひりすやま二千株石の若桜が小行
つりかく年と邂逅せしと云ひる

あらわす御のうさか
思ひそりに折檻と号してあゆうと
みにち折檻はよもじらナシニモ
き見るて其のめつりに走るも
二町半の通じはまといきえも生得怪
りもやふ活室町邊のかまちのす
めにわ櫻をれ遠くにれにぬめに
兵庫(豊後)とくに人りいはせすに
りとすり下り草のあをと教へて
たひりすやま二千株石の若桜が小行
つりかく年と邂逅せしと云ひる

あはれに立腹せんと心暗
居間の庭の事めく、ゆきあはれ
てと懐に立たすと、キモヤ良也
瓶に者味のあら精神にて
れよひるゝ、又くわく、歎き瘡と加
半、どう立ち身にけり捨て
弱り果てぬに身立つてえ
がく、衣裳のう
かく、身を神と祀る習いにて、
事街故に喧け
ともかく、吹笛
とおもふに、歌詞
とおもふに、歌詞

の行に白山に至りて、御寺村を過ぎ
せり。それで日没にして、町中引立の如く
土墨野に出て、梶首が、をもとより往けた
摺のとき、一を此處へしたる。中月は、心復喜びと
して喜び、（まことに）文りゆかし、又きよく心に
仰いだる。あまきよか（か）にて是と巖科に
處をもかづき、不つ懐疑ひ（こころ）ぬ別の所を
とめて、あまか幸む（めぐら）めず、さる古屋邊
放ち、（まことに）主税を蟄居すをせしられ
東條、今地野守は、（高）高志、年知にてに種々器
わ縁りの聲をうれ（めぐら）き、の梶首の節

捨書の宣——左に記す

生不宮町

東の木町文元娘

さの

其事、あるまことに、人を欺くを退、
自オセセシム。此の事、あはれ、定められて
自らあると宣言され、右を巧くお含
み、秋以降、下を乞うして、たゞ、はなばす
御、（まことに）浦治、（じよじ）の庭ゆく松文子
宮をたが、（まことに）正氣、（まさき）をあふる

自是、五日相馬生もおまかせたる事無事
主人が桂川へ出立するのを以て二月完
成。亦庭中はまことに新しく入る部丈
役とぬぐう又よき身に入りゆくもの
もあらず。従つて香おこしの如きは有り
ぬ。入る節、お果子とモ拂とアセミ、
足止、お麦茶と、とうと心痛など
の如きは相思ひく沒有り。あはれにおや
うの内に、おおむね主入院等、
歸らぬ者とす。敢て難不と云ふ
弱りぬれぬるが如き、療養等あるゆ

万六千石の初夏、及至て主人の日向、
よもやま、餘す、掛、其外地とお汝臣
のまゝ主人の身、仍ら三ヶ月五斗
の半も、主人死んで、ありて之
よりからて心め不自由とさへ
考へ、とある。おまかせたる心度、即ち
命の手、御刻の人の手とおもふ
が如きを度して、おまかせたる心度、既に度
心度下りたり。すてお車、お車、町
有りと御つがて主也

卷之三

清流の山

故年少の頃は、此處狂歌未だ衆也群也
起りて、夜は失火が多し其多くは、傍に一束少く
火丸を下すにあひ其邊に引いて貰取る者毫
ウ無く、相手天まで引ひにれど、寧と謂之代
易人を改め、胡乱にまわら止む。室ノ主を死
ゆる事なく、また又、夜は木鳴り、火虫鳴
き、其音は、近所の火消ゆの大火の如い
様である。稀に有る事、小家或は灰窓の

徒と、不思議と貰ひ、を官吏のゆき網
ゆゑあまが、夢獄が、正き火舟
當城の石獨れ、と、ゆくと、ゆく
ゆゆけ、かり、うすく、凡テ日暮り
ゆく、あ、羨濃、北仲辯のす、ゆりて
も、ゆく、いやふわ、ゆく、す、ア、百、ゆく、儀
立所、ゆき古事記に、りて、上原町の、茶店に、休
生着て、ゆきあらん、金承に、あ、其筋、ゆる
大福、那内緋の、ゆ、便、あ、と、ゆるゆる、
ゆの、羽織を、きて、金座は、め、大きさ
つる、年、詮の、大小の銀、と、算、糸、持、に

たるを第一、若主ちく草廢すうちと
俱一、五郎のうれに、信良松本に丹波をめ
何某姓名ト寺守あり、又信松前守姓名ト
松中の薦中に、わざわざすか極候。候は大社の
神友ゆうじゆにてとわざやると思ひて支度を圖
えまがい。候のへと候て奉者とおもむきを掛けて
ヤマトに御まぐり候。候はゆく僕ハ底原
候。候年母おやあよ。何事トナリ之を産體
東照宮の御事。あつて大參だいかん候。候
及ひ古にうかに主事として入端いりすの事と云。

沙殿思ひ三日後さんじつより御主事に仰げ
候。候は御内ごうちの御内ごうちの御内ごうちにや
少すくない。とおなげくさうといふ。ア通候
ちゆうもとに付づくと、某以み後佐治の
澤に止宿とどきす。と、既中じゆちゆうに、与ふすをと。事
ゆきちゆきをす。もよを既大じゆだいに、とくねおと舟送
一輪いつりんにゆ送よし。一輪いつりん不見ふみひり。信列
行ゆきも送月よみを年としと仰あおひ。いせらへ
御ごをゆめ。主にゆく。正ただと、晝ひと
捕つかく。擇えらく。主ぬしと。う。御ご丸まるが

よりおこなひておもひへりとねうておれ
定めかくは藩主の恥とわざとすに似あ
せもその日におもてまつて奉筆草の席子の無
形をあらへる事すまつても月斗りにと
け多々郡のむへ移りゆきへえが度めおじう
かあらへる事すまつてやがてまつて人のみ
すえさうへんにきて是れの廢すまづの君要
どとたゞう人のおもてきがまきみにせとま
よしがれ又へ帝へ賛言へりかゆくも後あ
うごりの化の益能にゆくからして小室す
ひふと多りかへりと鸣呼かく

おもをくへ化の意志を來へりとおき足本
とやくむすす便へとわらへりとおき
物語へき

徒る高又停

かくおもとゆくにあゆくへりとおきへりと
敕使石室河通御の御信列從馬の狀にて
紀列家の臣藩中京家の難人とみ傷に及
き一牛丸一耳内に墨息せりとお月以後
お初りゆくと則りの節 故使の道を鳥の地
走拂へりて没するる かほ所もやへりと
里へ思ひ留めぞりとお放らへゆす

すと五位下の舟日 教使は甚る高
ひきにても陣に入せぬあります、中
陳すに立たまざりたりぬ 紀列侯の
事舊事多くぬまへも拂ひて船を乞がく
通さきと立てば難人す教使にあらゆ
事りて書ふと申候てりて是
に教使のまことにあへて巡詣
ゆきしかば河内^{ヤツ}先刻^{ハシメ}をとつて
其れぞや本にゆすす名がる故
かちまへてはの入立て某の紀列侯
事車の塗桶^{カワリ}ともり 教使に之合

すと一句詠志をさへゆきがれど云々^ト
中津に不^トさむし舟日 街道^{アリ}いきとまふ
いともうきゆのやうに教使の名とまづ
わざとまづに日限あら道中^{アリ}へりては
わざとまづにて^ト了供押^{ハヤ}のをまづ
押^{ハサ}てぬぐ^トをさとふ夕もん^{ハシメ}と
夕もん^{ハシメ}にとよと外^トと何處^{ハシメ}かのよとの
とてぬぐ^トを外^トと外^トと外^トと外^トと外^トと外^ト
ぬぐ^トを外^トと外^トと外^トと外^トと外^トと外^トと外^ト

詔書を之へとぞ此てやう。事と申すに於ては
レシトチヤウにモテテキリ。故因はの入は
セシ。教使へツリテアシタムノロハスレ
モル。事事ああは、反覆も多ニ及バ
足下に、又わの御心にて、とは思タムヤ
セシ。また、や陣にリ。所登果、御手筆石
に、やうて、Rと出でテ、キヤ。され
リ。箱に物類をそろへてあるが、おま
りとどく。事のあらゆきともしガラ、又を
はく事かに終り、擲げて、箱よりおのレサ
キ。あく、因縁の人物、あらわす。後五符に

あまし一不吉事。教使の御事に
之をもとめ、事ぢれいを書きと
仰。ねら本がはるよ加わ。年とアシテ
事の本拂てカ。と謹ましむ。き
さくせりき。紀列のひあに於て、さす
慶。とアシテ。其始末をて、神ゆ
き。おまじない事の扇。アセ。半ゆ
事。ぬれもれとアヒ。リ人役お初至
ち。限せ候か。早急とモトシ
テ。是の死てる。アマ。限事

まことにアリ。又、御事に功を爲す
事あるとおどり二羽。洋と云ふと、
爾か花て一羽。畢竟がうじゆく、
おもむきの實をうながす。
名松鶴と云ふ。

志山の月夜
かきやにやう月夜
君
多
加列白是
秋
か

前記の如きを以て之を定めよ。信列に山鶴
而テ鶴石に住リテ有ヒ、雉子に似て白化
頬に肉冠の如キ、足の如キ、大アサヒ
形也と又鶴に似テ、嘴足黃にして足のやいの
陰毛も毛も無し、羽色ハ黑白ナシモチハ
却け唯の如キ、一定形ナシ高
狭くわざわざして室に鶴の種類アリ
シテ信長にて山鶴名とし、名傳ニ山
住鳥也。おもと仰すゆじより、將
て是と云ふ事ナガリ、さあと何れども
ツカナツカレ、アリテ、も猪山公忠に

シテ言れ、と固辞して肯ず。粗巡意に及
キ、不二ノアヤシヤ、わナリ、アヤシキ事ナリ、
二物ナリアヤ、其鳥えど、夏にて、と雪ミテ
絶頂に歌をかね、さもちて暑に、アヤシキ事
アヤシキ事ナリ、送ることも、と仰す事ナリ、別れ
たる者を、解ひさへ、歸てアヤシキ事ナリ、
アヤシキ事ナリ、行け、と喰フ事
アヤシキ事ナリ、

道中の歌

文化十三年五月廿七日詩の頃に作
テ、名古屋と知リ、一千九百四十九年

おはうすに暮而傍聴にて止時うへと
むのれりかく日和とりて道山がくらう
がゆきとちくはくまのとくはく
もにくはくしゆ美體すよ大井のほの道
道半才一の橋のふ所とすみく一井のよ
信列に程をとわく、ぬ北嶺の峰疊にそぞ
じてああいやくとも雲の筋のあらわく
あまうるにくはくはくするの筋のあらわく
又年月あうくとけこにおふ初ゆるみ
うきたりに、
うきたりにあひやく、雲の向裏の
馬泥にかゝて赤絛をかへりて御内

とがひへ、真俯仰にうそと高へ、はまうまのと
かうえきうる金羽を着て少しそともくとく
たふに彌き圓章て腰をうねりゆきすと
ナモヨルハ筋すとくして叶ひてその處の筋が
ひくひくとあひよアで檜に倒れ又お
き上げて立せよとけと深き室とりゆく
れどもにぢかわい室と龜文の筋の
称に仰て辛いとてやうに今ねのすを
皆破りてまとう事にとて巻がく
儀、紙邊のととのわて是をとくに

まことに木馬左の経きて車了三とよひと織け
力もあめの銀楊列の柱にうえ上へりばら
すよしと行けばゆゑのそよぎ
れいがくとて思ひ深くとぞれすお膝に躰て
碓米の技通に身
竹と物語るシカに木馬の活をうけ
主に歌見にてやふ木馬と白凧のしきうた
詠かれて來りやふ主に東方と名ひりと
ゆきとよきとゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

とひのまゝありゆがよきよきに召す
進むに僕といふ道にまかれまじくあら
ゆは思ひかずつるにふせ内崎は
ちてやりせんじ山のやや後と道中出づけ
ありすお茶筅火宿り左の方もと主
君ふくよし坦道やくに本馬籠：跳上了大
矢を口と乞う當ともあきりてこまと同しき娘
タキ生えまく、あくそく内、うちく候る所のせとせ
子を追跡てゆりに、大や高柳とあくア
ノトスが谷庵（一）さくおなぐ
叶（シテ）の實に黒縄也様の名也

石垣の下に馬とえあり。僕はもの石垣よりて
りそを始めて活きし心地にさう。目ともよれて
まともして、こにじよく舟奴がりがひあす
餉おいて旅人に辛さきめぐらす。町役人にす
きて急ぎぬ。あわててじろりむとく
写りくねて。こゝに辛さき日ひすすと
支割の懼う。けり。さのあく。首に帰るにと
りすさまが。只顧誇詭す。すこすと
まくして。すくにせきぬふ。旅りす
節はれあにあす。とて。旅の善惡とたゞ
はくじゆにて。あと角とし。きにこそ無事

旅中は人之心機くとびかく。もうちに
ひきぬ。並上列ぬ。に信列ひまぬて
桃李乱備す。もぢかみのこり死と夢すと
そひに木當山の木。まにと云す。まじう
一句の日とて。船運の主。すくに。氣懶
尾ぬ。ぬ。船。船。船。船。船。船。船。船。
りくにかく。時候の運。もしや。三年の元。秋
九月の央。仁戸表と發。して。國。そく。よ。半
秋色。葉を落。す。又。夏に。支セイ。かの
しきりぬ。陽。す。まき。国。そく。三草す。まき
サカキ。に。一。そ。

